

**1 学校教育目標**

学ぶ 鍛える 思いやる

**2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像**

○学校像	持続可能な社会の実現に向けて 社会の変化に対応し進化し続ける学校 安心・安全な学校
○児童・生徒像	豊かな創造性を備え、持続可能な社会の創り手となる生徒の育成 1 文章や情報を正確に読み解き、対応する力をもつ生徒 2 様々な分野に対して好奇心、探求心をもつ生徒 3 他者の意見を受容し、調整する力を身につけた生徒 4 困難なことを乗り越える力をもつ生徒 5 価値を見つけ出す感性と力を備えた生徒
○教師像	持続可能な社会の創り手の一員として、多様性を受け入れ、新たな価値を創造する教師 Society5.0を生きる生徒を育てる教師 学び続ける教師

**3 学校の現状及び前年度の成果と課題**

**1 学校の現状と課題**  
 予測困難な未来社会を牽引する人材となる生徒には、新しい価値を創造する力が求められる。多様性を受け入れ、協働し、価値を創造する力の育成には、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させることが必要であり、その上で思考力・判断力・表現力が育まれていく。  
 本校生徒は、学習意欲や自己肯定感が高いが、各種学力調査の結果は満足できるものではない。基礎基本の定着と読解力向上の取り組みを継続させ、主体的な学びの活動を取り入れ、思考力・判断力・表現力を育成していく。  
 また、学びの意欲が向上する基盤となるのは生活規律の確立、規範意識の醸成が重要である。引き続き、生活指導の徹底を図りたい。

**2 成果**  
 生徒の学力向上には、教師の授業改善・授業力向上が不可欠である。教師の授業観察週間と研修の実施は今後も継続していく。A I ドリル、I C T 機器、Google work space for Education を教育活動全般に取り入れ、G I G A スクール構想を進めることができた。

**4 重点的な取組事項**

	内 容	実施期間（年度） R:令和				
		R2	R3	R4	R5	R6
1	学力向上アクションプラン	○	○	○	○	○
2	支援の必要な生徒、不登校生徒への継続的支援	○	○	○	○	○
3	生活規律の確立、規範意識の醸成	○	○	○	○	○
4	学校、家庭、地域の協働による生徒の育成	○	○	○	○	○

## 5 令和4年度の重点目標

重点的な取組事項－1		学力向上アクションプラン							
A 今年度の成果目標		達成基準 (目標通過率)		実施結果 (通過率結果)		コメント・課題		達成度 ◎○△●	
学びの基礎と学習意欲の向上		学びの基礎の向上3%上昇 年度末到達度テスト正答率50%		学びの基礎、年度末到達度テスト正答率については目標を達成できた。		区の平均値を上回ることはできなかった教科もあるが、概ね国数英とも上昇傾向である。		○	
B 目標実現に向けた取組み									
新・継	アクションプラン	対象・実施教科	頻度・実施時期	具体的な取り組み内容 (誰が、何を、どのように)	達成確認方法	達成目標 (=数値) (いつ・何を・どの程度)	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●
1 新規	AIドリルの活用	5教科 (国数英社理) 全学年	通年 週1回	朝学習、放課後補充等でAIドリルを活用する。	活用頻度の確認 区学力調査意識調査 生活アンケート	学びの基礎の向上。該当項目3%上昇	AIドリルの活用は、全学年5教科で行われている。11月に実施した生活アンケートでは学びの基礎は概ね3~10%以上、上昇した。	AIドリルを学習評価にどの様に反映させるかを検討していきたい。	◎
2 継続・新規	Google Work space for Educationの活用 NIE・読書活動の推進	5教科 (国数英社理) 全学年	通年	各教科の特性や単元の性質にあわせ、classroom、Formes、Meetを活用し、ハイブリッド型の学習を推進する。 読解力向上のため、NIE、朝読書を継続する。	活用頻度の確認 区学力調査意識調査 生活アンケート 各種コンテスト	学びの基礎の向上。該当項目3%上昇	Google Classroom、Forms、Jambordなどのツールは授業に関わらずあらゆる教育活動で活用されている。NIEの取組は予定通り行われた。	現在の取組を、如何に各種学力調査結果に反映させていくかが課題である。	◎
3 継続	教員の授業力向上の取組	全教科 全学年	通年	全教員 足立スタンダードの徹底。 十三中スタンダードによる授業観察週間の設定と振り返り研修の実施。 小中連携を軸とした授業研究。 ICT機器・ツールの積極的活用。	生徒による授業アンケート	「めあて」「まとめ」の実施100% 「指示や説明のわかりやすさ」80%以上。 「学ぶ楽しさ」80%以上。	「めあて」「まとめ」の実施は100%。「指示や説明のわかりやすさ」や「学ぶ楽しさ」は、80%の目標値に届かない教科があった。	ICT機器・ツールの積極的活用は推進され、教員の授業力向上の取組も実施し、授業改善へ意欲的に取り組む教員は増加した。「まとめ」の徹底が課題である。	○

重点的な取組事項－２		支援の必要な生徒への継続的支援			
A 今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度	
支援を要する生徒の情報共有 特別支援教室の円滑な運営 不登校生徒への継続的な支援	関係諸機関との円滑な連携 特別支援教室退級見込み生徒の増加 教室復帰を目指せる生徒の増加	関係機関との連携や特別支援教室退室見込み生徒の増加は達成できた。教室復帰を目指せる生徒を増加させることはできなかった。	組織的に支援の在り方を検討することはできている。不登校生徒の適切な支援が課題。	○	
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
支援の必要な生徒に対する情報共有と適切な支援の提供	支援の必要な生徒の居場所作り 外部専門機関との円滑な連携体制の構築	定期的な特別支援教育委員会の開催。 SC、SSWと連携した多面的なカウンセリングと支援。 外部専門機関との適切な連携（ケース会議等の開催）	特別支援教育委員会で、情報共有が行われ、支援の必要な生徒を見出し、SC・SSW、関係機関につなげることができた。	潜在している支援の必要な生徒を見出し、適切な支援につなげたい。	○
特別支援教室の円滑な運営と連携体制の構築	取り出し授業の円滑な実施。所属学級担任との十分な情報共有と連携。 退級見込み生徒の増加。	特別支援コーディネーターを中心とした特別支援教育委員会等での情報共有と調整。 円滑な個別支援計画の作成と実施。	特別支援コーディネーターを中心に、組織的に運営が行われた。	所属学級担任、学年教員との連携を強化する。	◎
不登校生徒に対する継続的な支援	教室復帰を目指せる生徒の増加。	SSW、登校サポーター、チャレンジ学級等の活用。 個別対応を要する生徒の居場所の確保と学習支援を行うSSルームの組織的な運営。	不登校生徒は増加傾向にあり、多面的に原因を探求する必要があった。外部機関とのさらなる連携強化が必要である。	不登校の可能性のある生徒を早期に見出し、適切な支援につなげていきたい。	△

重点的な取組事項－3		生活規律の確立、規範意識の醸成			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
生活規律の確立、自己肯定感、自己有用感、帰属意識の醸成		生活アンケート等による該当項目前年度比現状維持～3%上昇	11月に行った生活アンケートでは当該項目全てが5～20%増加した。	落ち着いた学校生活は、生徒に帰属意識や母校を誇りに思う気持ちを増加させた。	◎
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
安心・安全な学校生活を送るために生活規律の徹底	生活アンケート「あいさつ、服装、持ち物などについて、学校のきまり」を守っている90%以上。	生活指導の徹底。生徒会執行部や学年委員会を中心に、生徒の主体的な活動を取り入れた生活規律徹底のための活動を展開。	当該項目は、100%近い達成率となった。生活指導部を中心とした、規律の徹底指導や生徒会執行部や学年委員の主体的な活動により、生徒の規範意識がより高まった。	現在の取組を進化させ、現状維持以上を目指していきたい。	◎
情報モラルの醸成	生活アンケートにおけるSNSトラブルに巻き込まれたことがある生徒の割合10%以下	セーフティ教室を軸とした情報モラル教育の実施と保護者への啓発活動の実施。	11月の生活アンケートによると、1年生のSNSトラブル体験者は20%を超えていた。学年が上がると減少する傾向になる。	各種ツールの進化のスピードにどのように学校として対応していくかが課題である。	○
いじめ防止に向けた取組の実施と早期発見早期対応	いじめアンケートによるいじめの申告が各学年3%以下を目指す	休み時間等の巡回。生徒の見守りを常に行い、早期発見早期対応につなげる。 QUアンケートの結果分析とQU研修会の実施。 SC・SSWとの連携生活指導部、いじめ防止対策委員会を中心とした組織マネジメントによるいじめ対応。外部機関との適切な連携。	休み時間などの巡回から、生徒の課題を早期に発見し、組織的な対応を心がけている。また、WebQUの分析及び研修会を行った。SC・SSWとの連携も円滑であった。いじめの申告は3%以下であったが、SNS上でのトラブルが「見えないいじめ」につながっていることがあった。	教員の「気づく力」を育成し、早期発見、対応に努めたい。また、SNSトラブルから発するいじめが増加しており、情報モラルの徹底とあわせ、進化する各種ツールにどのように対応していくかが課題である。	○

重点的な取組事項－４		学校、家庭、地域の協働による生徒の育成			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
地域人材を活用した教育活動の実践 地域への帰属感・誇りの醸成		生活アンケート「地域に貢献できる大人になりたい」60%以上	「地域に貢献できる大人になりたい」は、各学年との70%を超えた。	今後も地域とのつながりを大切にしていきたい。	○
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
地域人材を活用したキャリア教育の実践	保護者アンケート「学校はキャリア教育によく取り組んでいる」の「わからない」を5%減少	開かれた学校づくり協議会を中心とした地域人材による「職業人の話を聞く会」（1年）マナー講座（2年）、面接指導（3年）等の実施。 キャリア教育に関する情報発信。	新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、3年生の面接指導の実施はできなかった。 保護者アンケート結果は、「学校はキャリア教育によく取り組んでいる」の「わからない」の数値を減少させることができなかった。	地域人材を活用したキャリア教育は実施することができたが、「キャリア教育」＝高校選びの印象が保護者に強く、「わからない」を走減少させていくかが課題である。	○
地域と協働した活動の推進	生活アンケート「地域に貢献できる大人になりたい」60%以上	生徒会執行部を中心としたペットボトルキャップの回収。 全校生徒による地域清掃活動 各種委員会や部活単位の体験活動やボランティア活動。  PTA・地域主体の「あしの芽祭」への参加。 PTAと生徒会の協働によるあいさつ運動の実施。	新型コロナウイルス感染症拡大のため、地域清掃は実施できなかった。ボランティア活動も同様に、予定していたが、中止になった取組がある。PTAと協働したあいさつ運動は実施できなかったが、生徒会執行部が主体的に行った。 11月に行われた地域文化祭「あしの芽祭」では、生徒と地域人材が交流し、生徒の自己有用感、地域を誇りに思う気持ちが向上した。	感染症対策をとりながら、今後どのように地域と連携していくかが課題である。	○

## 6 まとめ

### (1) 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

コロナ禍のため、制限はあったが、学校行事をほぼ予定通り行うことができた。様々な行事が生徒の健全育成に大きな役割を果たしていると感じた一年であった。

4月の区調査では、自己肯定感や苦手なことでもがんばろうとする気持ちは決して高いとは言えなかった。しかし、運動会や宿泊行事、連合行事に実施後、11月に行った学校独自のアンケートでは、9割の生徒が「行事や体験活動を通して達成感を得られた」と答えている。「努力すれば自分もたいていのことはできると思う」と答えた生徒は、4月は全学年平均81%であったのが、11月には87%に上昇した。各学年とも5～6%の伸びである。「自分には良いところがある」についても4月は全学年平均65%程度であったのに対し、11月75%に上昇している。特に3年生は8割の生徒が自己肯定感に高まりを見せた。

次年度以降も感染症対策をとりながら、新しい視点で行事を実施していきたい。

A IドリルやGoogle Workspace for Education各種ツールの活用は教育活動全般でより一層進んだ。今後も継続発展させ、より有効的な活用方法を探っていく。

特別な支援が必要な生徒に対する組織的な対応はある程度構築された。特別支援教室の運営も円滑に行われており、生徒の行動変容も見られるようになった。しかし、一方で不登校生徒の割合は増加傾向にあり、対象生徒一人一人にどの様な支援が必要なのかを関係機関と連携しながら考えていかなければいけない。

新型コロナウイルス感染症が教育現場にもたらした影響は、とても大きい。コロナ以前の状態に近づけていくのには、時間と困難を要すると思われる。学校として、根気よく、真摯に子供たちの抱える課題と向きあい、そして、コロナ以前に戻すという意識ではなく、新しい価値を創造できる教師や生徒を育てる学校でありたい。

### (2) 保護者や地域へのメッセージ

常に600名近い生徒が在籍する本校で、感染症対策をとりながら、学校行事を行うのには様々な困難が生じる。保護者の皆様には、多くの我慢をお願いしてきた。協力していただいたことには感謝しかない。来年度は感染症対策をとりながら、できる範囲での学校行事などの公開を行い、保護者の不安感を解消していきたい。

また、今年度は地域と協働して、道徳地区公開講座や地域文化祭、家庭教育講演会を行うことができた。「今住んでいる地域に貢献できるような大人になりたい」と答えた生徒は各学年とも70%以上である。地域と深い結びつきをもつ本校ならではの数値結果となっている。今後も「共に地域の子供を育てる」という共通認識のもと、協力しあっていきたい。

### (3) その他（学校教育活動全般について）

A Iドリル、ICT機器や、Google Workspace for Education各種ツールなどを活用しながら学力向上に努めていきたい。

